

19. 胃切除後胆嚢胆石—発生頻度および超音波像の検討

中村広志, 安原一彰, 木村邦夫
吉田弘道, 森 義雄, 家里憲二
山本駿一, 岩垂 信, 西島 浩
(千葉社会保険)

当院で胃切除を行った62例を対象として, 術後の胆嚢胆石の発生頻度と超音波像を検討した。6例に胆石の出現を認め, Kaplan-Meier 法による累積発生率は2年で10.3%であった。超音波像は6例とも色素石と考えられる遊離型を呈した。胃切除および迷走神経の切断による胆嚢収縮機能の低下や胆汁組成の変化などが原因となり, 胆石が生成されたものと考えられる。

20. ICG 排泄異常を伴った馬鈴薯肝と思われる1例

福沢 健, 斉藤博文, 小山秀彦
斉藤正明, 佐藤重明(鹿島労災)

症例は36歳, 男性。昭和48年より軽度肝機能障害を指摘されている。超音波, CT MRI にて肝両葉に多発する大結節を認めた。門脈造影では門脈枝の圧排と伸展が認められ, 肝静脈造影では肝静脈の分枝の減少と屈曲, V-Vshunt が認められた。結節より採取した生検肝は正常肝組織であった。また ICGR (15) は71%と高度停滞を示したのに対し BSPR (45) は4%と正常であった。以上より ICG排泄異常を伴った馬鈴薯肝と診断した。

21. Crigler-Najjar syndrome type II の1例

富沢 稔, 武者 広隆, 山田嘉仁
遊佐 昌樹, 篠崎 俊秀, 吉田孝宣
平野 康之, 御園生正紀, 内海勝夫
小林千鶴子, 森 博志(国立千葉)

安原 一彰 (千葉社会保険)

24歳, 男性。主訴は黄疸。T-Bil 3.7 D-Bil 0.9, 低カロリー食負荷試験, ニコチン酸負荷試験ともに陽性で, UDP-glucuronyl transferase 活性は低下していた。

22. 興味ある治療経過をたどった B 型慢性肝炎の2例

村岡秀樹, 山崎一人, 加藤 敬
篠崎正美, 後藤信昭, 永井 順
(沼津市立)

われわれは最近, 興味ある治療経過をたどった B 型慢性肝炎2例を経験した。1例は2度のリバースト・セロコンバージョンののち, 3度目のセロコンをえている症例で, もう1例は IFN 間欠投与がセロコンに有効であったと推測された症例である。

23. 肝機能異常者における HCV 抗体の検討 特に健康診断との関係について

石原 武, 多田 稔, 田口忠男
岩間章介, 石原運雄, 加藤繁夫
(千葉労災)

平成元年10月に労働安全衛生規則が改正され, 健康診断時に肝機能検査 (GOT, GPT, γ -GTP) の実施が義務づけられた。この影響もあり健康診断で肝機能異常を指摘され来院する症例が増えてきた。今回われわれはこのような症例109例を検討した。内訳は脂肪肝が約3割, ウイルス性肝炎 (HCV 抗体陽性率14.7%, HBs 抗原陽性率3.7%), 慢性肝障害がそれぞれ約2割, アルコール性肝障害が約1割, 正常が約2割であった。特に HCV 抗体陰性者に脂肪肝が多い傾向を認めたので報告した。

24. HCV 抗体と ADA

倉田矩正, 重田英夫
(千葉県がんセンター・臨床検査部)

非A非B型肝炎と考えられた48例の血清 HCV 抗体 (C100-3 抗体) と ADA 活性を測定した。HCV 抗体陽性38例, ADA39 IU/L。陰性10例, ADA26 と陽性例の方が高値であった。陽性例の方が高値であった。陽性例の経過中に TA を含む検査データが全く正常値を示した6例でも ADA のみが異常値を維持していた。他のルーチン検査が全く正常で ADA のみの高値が10年来続いていた例では, 初期から HCV 抗体陽性の持続が確認された。ADA は臓器非特異的な検査だが, ルーチンに検査しこれのみ異常値の場合でも, HC を含む生体の免疫系に変化をきたす疾患の検索を進めて行くことが重要である。